

シルクロード - 中国・西域の歴史と少数民族

野口信彦

1998年9月

16700字

はじめに

中国は5つの地域から構成されている多民族国家である。中華人民共和国の国旗である五星紅旗には、漢族を象徴する大きな星が1つと、それをとりまくように、それぞれ満州族、モンゴル族、ウイグル族、チベット族を象徴している4つの小さな星がある。

中国の西域は現在の新疆ウイグル自治区とほぼ同じ地域である。新疆ウイグル自治区といえば“シルクロード”をイメージできる。絹の道=シルクロードは昔から、中国、モンゴル、インドと中央アジアや遠くペルシャ、ローマなどとの政治、経済、文化が交差したルートであり、諸民族の交流の場でもあった。新疆地区は、その昔のシルクロードでは最も重要な役割を果たしてきた。

15世紀、ヨーロッパからはじまった「大航海時代」以降、東西の交易を艦船に譲り、シルクロードの歴史的使命は終焉を迎えたが、現代中国の経済改革・対外開放政策下において、新疆ウイグルの国際的な役割は次第に高まりつつある。

しかし、一般に私たち日本人が得ることのできるシルクロード情報の、そのほとんどすべてが、中国政府あるいはその影響下の機関による情報であり、ウイグル族など少数民族当事者のものは皆無に近い。したがって統治者側の情報に限定せざるを得ないというのが現状である。もうひとつは、ロマン溢れるシルクロードに寄せる日本人の関心は非常に高いが、現代中国の新疆という非常に関心が低いことである。たとえば、98年前半の6か月間の日経、読売、毎日等の新聞紙上で新疆のニュー



ースが掲載された件数がわずか3件。逆に過去3か月間、欧米の英字新聞が新疆を取り上げたのが約500件である(日経論説委員)。日本人の関心が低いというより、日本人の日常生活上、切実な必要性がないということが実際の所であろう。

新疆などの少数民族地域は、牧場、森林、植物、生物、鉱山、水源などの天然資源が非常に豊かである。新疆は中国の牧畜業や綿花生産の基地でもあり、石油の産地でもある。1997年の政府公布によると、少数民族地域での草原面積は3億ヘクタールで中国草原総面

積の約 75%を占め、森林面積は 5648 万ヘクタールあり、中国森林総面積の約 43.9%を占めている。また、木材の総保有量の約 55.9%、同じく水力資源は約 65.9%と少数民族地域は、中国の現代化建設を推進していくうえで、きわめて重要な位置を占めている。

今後、新たな交流の機運が高まるであろうこの時期に、歴史のロマンに満ちた中国の新疆・シルクロードを、現代の視点からみることも必要になってくるのではないだろうか。

私はかつて 1960 年代なかば、北京に留学した経験を持つ。その後、中国を理解するためにも中国の歴史と自然を深く理解したいと思った。特に 90 年代になってからの天山山脈やチベット・ヒマラヤやモンゴルへの登山やトレッキングなどを通して、シルクロードと少数民族に関する研究を思いついた。今回は、その愛すべき中国の陰にある、過去から現代にいたる根の深い西域・シルクロードの民族問題についての状況と問題点をさぐってみよう。

1 . 中国と西域

これまで中国の歴史というと、中国文明が最初に誕生した中原（一般的に黄土の厚い堆積からなる黄土高原の東の部分を目指す）を舞台とした漢族の歴史を考えることが多かった。これは高校や大学の教科書・書籍や一般向けの中国史の概説書や専門書にも多くみられる傾向である。当然、中国では漢族が諸民族のなかでも大多数を占めているから、これはやむを得ないことではある。中国の歴史を構造的に把握しようとするならば、どうしてもさきに述べた 5 民族の地域と勢力のバランスの変化という観点に立って考える必要がある。

中国は歴史上、多民族の国家を形づくってきた。それは、秦の時代から南北朝時代（紀元前 221～紀元 589 年）にわたり、漢代の西北地域 36 か国の漢王朝への帰属、その後の匈奴、鮮卑、羯、氏、羌による「五胡十六国」の乱立、隋代から元代（589～1368 年）の間における北部の契丹族の遼朝、西北部の西夏王朝、西南部チベットの吐蕃王朝、雲南の南詔王朝などの存在、モンゴル族が建てた元朝（1271～1367 年）、明代から女真（後の満州族）により建てられた清王朝、という歴史に示されている。

こうした分裂と融合の歴史のために、建国以前の中国にはさまざまな種族があり、その名称はさらに雑多であった。建国初期の 1953 年の報告では登録された民族の名称は 400 あまりに及び、雲南省だけでも 206 を数えた。

国家は民族の平等と団結、民族地域における自治政策を制定し推進するため、1953 年より民族識別の作業を進めた。

（1）シルクロードの位置と歴史遺産

シルクロードは西に向かって中原を経由して新疆に入ってから、天山南路、中路、北路と 3 つのルートに分かれている。沿路には多くの古城の遺跡、狼煙台、千仏洞、古墳群などが残されている。統計によると、そのなかには国家クラスの文化財が 14 か所、自治区クラスの文化財は 154 か所もある。それら天山各ルートには次のような遺跡群がある。天山南路には、楼蘭遺跡、ミーラン遺跡、ニヤ遺跡、タシュクルガン遺跡などがあり、天山中路のトルファンあたりには、交河故城、高昌故城（注 1）、ベゼクリク千仏洞（注 2）、ア

スターナ古墳群（注3）などがあり、庫車（クチャ）には、仏教伝来の第1の石窟 - キジル千仏洞、クズルガハーや狼煙台がある。

カシュガルには、イスラム教のエイティガル・寺院、アッパク・ホッジャと中国の皇帝に妃として行った悲劇の妃・香妃の墓、ウイグルの偉大な言語学者でウイグル語の大詞典作者であるマホメット・カシュガリーの記念館や墓などがある。さらに、天山北路にはジムサルに唐の時代の北庭都護府遺跡、イリのイリ將軍府遺跡、チンギスハーンの七代目のトホロ・チムールカーン墓、ウラン人古墳と草原石人像等々が点在している。

新疆は、中原から「胡」の国とも呼ばれ、3つの大山脈とそれに囲まれた2つの盆地にある。北はアルタイ山脈が西北より南東に位置し、南は崑崙山脈が東西に走り、最高峰は世界第2位のチョゴリ（K2、8611メートル）がある。北側のジュンガル盆地の面積は日本全土とほぼ等しく約38万平方キロあり、南側の天山山脈と崑崙山脈に挟まれているのがタリム盆地で面積は約53万平方キロ。新疆にはこの2つの巨大な盆地がある。タリム盆地のなかにはタクラマカン砂漠があり、面積は32・4万平方キロ、砂丘からなる移動性の砂礫砂漠で、タマリスク（紅柳）以外は不毛に近い。

天山と崑崙に囲まれた南疆・タリム盆地は、おそらく紀元前数世紀から高度な文化を持った都市国家が存在したに違いない。中国の王朝がその存在を知ったのは紀元前2世紀の末、前漢の武帝の時代に張騫（ちょうけん）が新疆を含めた西域と中央アジアに派遣されて以来のことである。

この頃のタリム盆地のオアシスを中心とした都市国家については『漢書』西域伝に詳しく記されているが、それによると、当時、楼蘭国、于国（うてん、今のホータン）、莎車国（さしゃ、今のヤルカンド）、疏勒国（そろく、今のカシュガル一帯）、龜茲国（きゅうじ、クチャ）、焉耆国（えんき、カラシャフル）などには1万数千人から8万人余りの人が住んでいたという。これらの都市国家の住人は主に農耕に従事していた。

（注1）高昌国 = トルファン盆地に5世紀から7世紀中葉にかけて栄えた国。五涼時代に沮（しよきよ）氏が北魏に滅ぼされると、その残党が西走して442年、高昌城に拠り、450年には車師国を併呑して高昌国を樹てた。460年に沮氏高昌が柔然に倒されると、こんどは伯周が高昌王に推され、以後、義成、首歸、張孟明、馬儒が王位を継承した。さらに498年、麹嘉が王位に就いてからは麹氏の子孫が140余年にわたって高昌に君臨し、とくに麹氏高昌の名をもって呼ばれる。640年に唐朝によって滅ぼされるまで続いた。その間、王族には漢人が多く、中国風の元号をたて、官制や服飾もすべて中国式となっている。

（注2）ベゼクリク千仏洞 = トルファンの周辺。木頭河の地溝右岸に造営された千仏洞。地名は「美しく飾られた所」という意。千仏洞は南北朝時代からつくられ、唐、五代、宋、元の窟まである。

（注3）アスターナ = 5世紀中期から6世紀中期までこの地に栄えた高昌国の古墳が多く、本願寺の大谷探検隊メンバーである橘瑞超やイギリスのスタインなどの調査により、貴重な文物が発見された。墓の様式は中国風で、死者の姓名、官名、経歴、埋葬年月などを銘記したものが出土したことから、高昌国の解明に有力な手がかりが得られた。

(2) 新疆ウイグル自治区の少数民族の人口

次に記す新疆を含めた中国各地各民族の人口は、中国政府および関係機関が発表した相当古い数字であり、あるいはそれにもとづいて引用された数字を拝借している。なぜならば、中国において少数民族の人口は国家機密になっているようだからである。カシュガルで会ったウイグル人の知識人に直接聞いたところ“ウイグルなど少数民族の統治者である漢民族政府は、けっして真実の数字を発表しないだろう”という答えがかえってきた。なぜならば“漢民族がいかに多く新疆に入り込んで我々ウイグルなどの少数民族を支配しているかが分かってしまうからだ”ともいう。“どうしたら人口が分かるのか”ときくと“中国共産党と政府のトップクラスか東トルキスタン分離・独立運動家であれば分かるかもしれない”という。カシュガルの飛行場で会った日本のある人間文化学の学者は“現在では、もう中国政府でも分からなくなっているのではないか”ともいっていた。日本で人口などというものは何ともない数字のようにみえるが、中国においては国家と民族間のきわめてシビアな問題なのである。

ウイグル自治区が成立したとき、新疆には13の民族が数えられるに過ぎなかったが、その後、中国各地から少数民族が流入して1982年の人口調査時には48に増えており、総人口は1600万人余りといわれている。中国全体では57の民族から構成されている。このうち漢族は全人口の約91.96%を占める(詳しくは別表を参照されたい)。中国を「人口衆多、地大物博」というが、「人口衆多」は漢族のことを指し、「地大物博」は少数民族のことを指す。

1988年の調査ではウイグル族が667万人、漢民族が547万人となっていた。もっとも、50年代から70年代まで毎年10数万人が流入あるいは文革で下放され、ウイグル分離主義運動が活発になってからは、中国政府が漢人青年を「生産建設兵団」として大量に移住させたので、現在では漢民族の人口がウイグルを上まわっている。これが現在、新疆の民族問題をかなり複雑にしている。さらに、カザフ族110万人、回族63万人、モンゴルとキルギス族がそれぞれ14万余人をかぞえる。また、シボ族とタジク族が3万人余りいる。中国領内のタジク族は、そのほとんどがタシュクルガン・タジク自治県に住む。新疆の他のイスラム系民族がチュルク(トルコ)系なのにならして、タジク族は唯一ラン系の言語を話す。ウズベク族と満族は約1万5千人いる。

ヤルカンド県に住むウズベク族は少数であるが、ウズベキスタン共和国の1300万人を合わせて、ウズベク族全体の人口は世界で1500万人に達する。このほかにも数は少ないが、タタール族、オロス(ロシア)族などの民族があげられる。タタール族は約600万人で全国でも5千人(1990年)に満たない少数民族中の少数民族である。

18世紀後半、辺境防衛のために中国東北部からシボ族、内モンゴルからはモンゴル族のチャハル部、ダウール族が乾隆帝の命で移住し、1771年には、はるか西のヴォルガ川下流域に移り住んでいたオイラト族の一派、トルグート部が戻ってきた。現在、これら新疆に移住してきた人々の子孫のうち、シボ族はイリ地区のチャブチャル・シボ自治県やホーチェン県に、チャハル部はボロターラ蒙古自治州に、ダウール族は塔城県(ターチェン)に、またトルグート部はホブクサル蒙古自治県とバインゴリン蒙古自治州に主に住んでいる。しかしその後、北疆地域に多く住みついたのはトルコ系のカザフ族である。現在、カ

ザフ族は北疆の牧畜地域のほとんどすべてにわたって居住しており、特にイリ・カザフ自治州に集中して住んでいる。

(3) ウイグル民族の成立とその名の由来

新疆の最大民族はウイグル族である。新疆には、全国のウイグルの 99.8% が住み、特に南疆のアクス、カシュガル、ホータン地区には新疆全体の 74% が集中している。現在、タリム盆地のオアシスの主人公ともいべきウイグル族はチュルク（トルコ）系である。しかし、かつてここはインド・イラン系の人々が活動していた世界であった。タリム盆地におけるいわゆるトルコ化は 9 世紀半ば、モンゴル高原を支配していたウイグル族がキルギス族によって滅亡し、ウイグル国家を形成していた多数のトルコ族が天山一帯に移動したことがきっかけであるといわれる。その後、11 世紀には中央アジアにあったトルコ系のカラハン朝の進出もあり、ウイグル族は次第にトルコ化されていったのである。

1920 年代末、ソ連に居住する同種のトルコ系住民にたいし、民族名を新たにつけた際に、古名のウイグルという民族名を使用し、その後、新疆のトルコ族もこれにならってウイグルとしたのである。このように、現在の新疆のウイグル族は歴史的に周辺国家の支配を受けるなかで混血を重ねてきており、それゆえにウイグル族の顔はさまざまである。典型的にインド・イラン系の顔をしたものもいれば、モンゴル系の顔をした人もいる。

(4) イスラム化の歴史

オアシスに住んでいた人々は、民族的にはインド・イラン系であった。それは、今世紀はじめにこの地域から発見された古代の文書からうかがうことができる。まもなくタリム盆地にはインドから中央アジアを経由して仏教が浸透し、一大仏教圏を形成する。中国への最初の仏教はタリム盆地を経由して入ったといわれる。仏教はその後、中国で中国化され、さらに朝鮮半島を経て 6 世紀半ば過ぎ、日本にもたらされた。

ウイグル、カザフ、回、キルギス、タジク、ウズベクなど 10 の民族はイスラム教を信仰している。モンゴル族は比率としては多くがチベット仏教（ラマ教）を、オロス（ロシア）族はロシア正教を信仰しており、少数の漢族はキリスト教を信仰している。

タリム盆地のイスラム化は、やはりカラハン朝の進出をきっかけとする。11 世紀、まず西部のカシュガル一帯がイスラム化されたが、ついで一大仏教王国であったホータンとイスラム勢力との熾烈な争いが展開された。しかし、この争いもイスラム側の勝利に終わり、タリム盆地のオアシス勢力は急速にイスラム化されていく。この波に抵抗したのがトルファン一帯のトルコ人である。周辺がイスラム化されるなか、15 世紀はじめまでは仏教を信仰していたことが記録に残されている。しかしイスラムを信奉するモグーリスタン汗国（モンゴル系イスラム教徒の国）の支配下に入ると、ウイグル族の多くが住むこの一帯もついにイスラム化し、タリム盆地のイスラム化がここに完成したのである。

(5) 少数民族の意志が反映されない遺跡保存の状況

タリム盆地周辺の古代遺跡は、未だに多くが 10 メートル、20 メートルの砂漠の下深く埋没している。現在、西域・新疆にも新興の中央アジアのカザフスタン、キルギスタン、タジキスタンやウズベキスタンあるいはトルクメニスタンなど各国の砂漠の下にも、人類史に大きな貢献をするであろう多くの貴重な遺跡・文物が埋没している。現在では、発掘にいたる計画はあまり聞かない。

私が訪れたトルファン近郊のアスターナ古墳には、係員もいない半地下にミイラが手の届くところに安置されていた。ガイド君の説明によると、ミイラにガラスの覆いがかけられたのは、つい 4 ~ 5 年ほど前のことだという。それまでは保存の措置がほとんど取られていなかったのである。同じく、玄奘三蔵が王からあたたかく迎えられたという高昌故城も、顕著な遺跡保存・修復の措置が施されている形跡はみえなかった。財源欠如という絶対的な問題のほかに、漢民族による少数民族蔑視からくる歴史遺産にたいする意識が垣間みえるのである。修復をしているといえは聞こえはいいが、観光収入のための改築が主な目的であったりするのが現状である。ここからも少数民族側の意志がほとんど反映されていない中国政府のやり方がうかがえる。

20 世紀初頭、帝国主義列強が郭煌（注 5）をはじめ、西域・中央アジアの貴重な文物を持ち去った。ロシアの東洋学者オルデンブルグ、ドイツのグリュンヴェーデルのトルファン探検隊、イギリスの探検家マルク・オーレル・スタイン、スウェーデンの地理学者スウェン・ヘディン、フランスの東洋学者ペリオ、ドイツの東洋学者ル・コック、そして皇室と姻戚関係にもあった浄土宗西本願寺 22 代宗主の大谷光瑞による大谷探検隊などがあつた。そのなかには、それぞれの政府の意向で派遣された探検隊もいたのである。たとえば、ル・コックは、郭煌の壁画を片っ端からはがして帰った。彼は、保存条件のそろった設備で貴重な文物を保存するという意志はあつたが、その後、ベルリンの空襲によって、そのほとんどが灰塵に帰したことから考えると、国連機関のユネスコなどによる国際的な援助競争などによる国際協力によって、保存条件のそろった元の場所や一堂に帰させることが必要なのではないだろうか。

（注 5）郭煌 = 甘肅省西北部にある都市。安西の南西約 110 キロに位置し、古来、西域交通の要地として栄えた。はじめ月氏が、ついで匈奴がこの地を領し、前漢・武帝の時代に西域への前進基地となる。当初は酒泉郡に属していたが、やがて前 1 世紀までには郭煌郡が設けられ、河西四郡の一つに数えられる。五胡十六国時代には西涼国が郭煌に都したが、やがて北涼、北魏に併合された。伝によれば、一時、前秦領となったとき、沙門楽 が町の東南 25 キロの鳴沙山中に第一窟を開き、以後、北魏、隋、唐、五代、宋、元と千年間にわたり仏教の石窟群が掘られることになる 1900 年にそのうちの一窟から膨大な古文書・写経類が発見され、窟内に描かれた壁画群とともに世界の東洋学および仏教美術研究に多大な寄与をした。

2 . 新疆ウイグル自治区形成の歴史

シルクロード上におけるオアシス都市国家は商業的性格を持ち、古来、東西交通上重要な役割を果たしてきた。そのために、この地域は常に周辺諸国からの軍事的脅威にさらさ

れてきた。もちろん、タリム盆地の支配をねらっていたのは北アジアの遊牧国家であったが、さらに中国の王朝もその支配に意欲的であった。

紀元前2世紀後半、前漢の武帝が張騫を中央アジアの部族・大月氏に派遣したころ、西域を支配していたのは、遊牧騎馬民族の匈奴（注6）と烏孫（注7）であった。その烏孫の中心は新疆の西部・イリ地方にあり、烏孫王の墓と思われるものもその一角にある。また、土地の人々は天山の西部分の山並みを烏孫山と称している。漢が匈奴に対抗するために王室の女性を2度にわたり烏孫王に降嫁させたことは有名である。その後、タリム盆地支配をめぐる漢と匈奴との熾烈な争いが続いた。匈奴は漢との争いに敗れ、タリム盆地から後退することもあったが、天山北部の草原は依然、その支配下にあった。

紀元3～4世紀以後、匈奴の支配が衰退した後、柔然（じゅうぜん）が勢力を伸ばす。その後、前漢、後漢と続く。

5世紀には、やはり北方遊牧騎馬民族である柔然、エフタルと続き、5世紀末、柔然の支配から独立した高車丁零（こうしゃていれい）が北疆地域に移動し、以後、ここはトルコ族の世界になる。

6世紀後半、突厥（とっけつ）（注8）が勢力を伸ばし、さらにタリム盆地のオアシスをも従属させている。

6世紀末、突厥は東西に分裂し、北疆は西突厥の領域に入った。その後、唐が西域に進出、西突厥と争い、7世紀半ば、これを滅ぼした。唐は北疆地域の牧畜民を管理・監督する役所として北庭都護府を現在の天山北麓のジムサルに置いた。このころから、唐は北アジアから中央アジアまで未曾有の領域を有する大帝国となっていく。

7世紀には唐が支配。840年、ウイグルが滅亡した後、多くのウイグル族が天山一帯に移住したことが知られている。その後、現在のトルファン一帯に中心を置いた西ウイグル国の支配を受けたが、12世紀はじめ、カラキタイ（西遼）の領域に入った。

8世紀には吐蕃（チベット）が支配した。8世紀の半ば、唐は安史の乱により国力が疲弊し、西域の支配が緩む。この後、新疆北部にはウイグルが勢力を伸ばし、9世紀にはウイグルが実質的に支配した。

13世紀はじめ、西域はチンギスハーン率いるモンゴルの支配下に入る。その後、モンゴル帝国のオゴタイ汗国、チャガタイ汗国などがこの地域を領有した。それまで北疆地域はトルコ族の世界であったが、このころバイカル湖付近からモンゴル系のオイラト族も移住し、次第にモンゴル族の世界へと変わっていったようである。

15世紀にはオイラト、モグーリスタン汗国の時代となった。15世紀前半、オイラト族が歴史的に顕著な活動をするのは、トゴン、エセン父子の時代と17世紀後半か18世紀半ばまで、いわゆるジュンガル王国の時代である。トゴン、エセンはその勢力を東の大興安嶺にまで広げ、モンゴリア最大の実力者としてその名を轟かせた。またジュンガル王国の時代、タリム盆地、中央アジアにまで進出し、一大遊牧国家を築きあげたが、18世紀半ば清朝の攻撃を受けて滅亡した。このとき、ジュンガリアの人的被害は甚だしく、椿園（チンエン）の『西域見聞録』によれば、清軍のために男女百万人が殺戮され、千里にわたって人煙が絶えたという。

18世紀には清朝の支配、東の中華帝国と西・北の遊牧騎馬民族などの侵入と支配など、ほとんど途切れることがなかった。新疆は18世紀後半、清朝の領域に入ったのち、北疆は

準部、南疆は回部として封建諸公の支配下におかれた。

19世紀末、新疆はロシア、イギリスなどの列強の侵略の対象となり、これを憂慮した清朝は1884年、新疆省を設置、本土と同列に置いた。辛亥革命の後、国民党政府から派遣された主席たちと新疆の住民との間に軋轢が生じ、しばしば暴動が発生した。

1949年、新疆首席に就任したボルハンは国民党から離別し、新疆の平和解放を宣言した。そして、1959年10月1日、中国では2番目の自治区、新疆ウイグル自治区が成立したのである。

他方、北疆地域は遊牧民族を中心に独特な歴史が展開された。

と、いう歴史認識と概略は、あくまでも中原の支配者であった歴代の中華帝国の視点などによるものである。我々日本人や諸外国のシルクロード・ファンも、知らず知らずのうちにその範疇の認識からスタートすることになる。機会があれば、故老舎からも高く評価されたウイグル族の偉大な詩人・マホメット・カシュガリーや同じく傑出した思想家・詩人でウイグル古典文学の代表的存在でもあり、後年、中国政府によって、焚書の憂き目にもあったユスフ・ハス・ハシブなどの著作を通した、ウイグル人による歴史展開の文書に是非、お目にかかりたいものである。

(注5) 匈奴 = 確実な記録には前4世紀末からモンゴルに現れ、以後5世紀間、北アジアに活躍した遊牧騎馬民族。はじめ前318年に韓、魏、趙、などが匈奴を率いて秦を攻撃した事件があり、その後はしばしば燕、趙、秦等の戦国諸国に侵入するようになった。そのため、これら諸国は長城を築き、北方の防備につとめた。秦の始皇帝は將軍蒙恬(もうてん)を派遣し、匈奴を陰山の北に退去させるが、冒頓(ぼくとつ)を単于(ぜんう)に戴いた匈奴は東胡、月氏、丁令等の諸族を撃破し、ついで前201年に中国の山西省北部に侵入する。漢の高祖は翌年、みずから大軍を率いて北征したが、40万の匈奴軍に包囲され、王妃が匈奴に巨額の貢物を贈って、長安に逃げ帰った。以後、漢の武帝の時代に衛青、霍去病らの將軍によって打撃を加えられるまで匈奴が優位にあったが、やがて内紛を繰り返し、その勢力はあと衰える。2世期の半ば以後、西方に移動して東洋史上から姿を消した。

(注6) 烏孫 = 中国の漢代から南北朝時代にかけて天山山脈の北方、イリ川流域からイシク・クル(湖)の周辺に展開した遊牧民族。はじめ河西にいた月氏と隣接していたが、匈奴に協力して月氏を西方に追ったのにもない、イリ地方に移住したものとされる。その後、匈奴より独立しイリ河流域にまで進出した漢と同盟関係を結ぶ。しかし烏孫内部には親漢派と親匈奴派とがあって対立し、やがて2世紀後半には鮮卑族の圧迫を受け、さらに5世紀後半になって柔然の侵略を受けてパミール方面へ逃げ、忽然と姿を消した。人種的にはトルコ人あるいはアーリア系と目されていたが、考古学調査によりサカ族の子孫との見方が強まっている。

(注7) 突厥(とっけつ) = 6世紀中葉から約2世紀間、蒙古高原からアルタイ地方、そしてトルキスタン地方まで支配下においた遊牧国家。はじめアルタイ山脈の南西にいた阿史那氏は柔然に服属していたが、その族長土門のとき強大となり、ジュンガリアにいた鉄勒諸部を討って服属させた。土門は551年には柔然を破って独立し、みずから伊利可汗と称した。その後、木杆可汗のとき柔然を滅亡させ、契丹を討ち、キルギスまで勢力下におき、本拠を北蒙古のウトケン山に移す。のちの東突厥である。一方、土門の弟ディザプロ

スはトルキスタンの経略に向かい、エフタルを滅ぼして本拠をユルドゥズ渓谷（クチャの北）におき西面可汗を称した。583年には独立し、西突厥と呼ばれたものである。いったん唐朝によって滅ぼされたが再興し、744年に内乱によって滅亡するまで続いた。

3．新疆ウイグル自治区における少数民族問題

（1）中国政府の少数民族政策の基本

中国は解放前にも解放後も、少数民族問題について、またその政策においてさまざまな段階を経てきている。解放後、中国の党と政府は少数民族政策に細心の注意と配慮をはらってきた。しかしその“細心の注意と配慮”の収斂するところは、民族自決権、分離・独立権の否定を基本とした少数民族政策にあり、同一地域での異民族同士の自治のみを認めるという「民族区域自治」政策である。

1982年に改定された新しい憲法には「中華人民共和国の各民族は、すべて平等である。国家は、各少数民族の合法的な権利および利益を保障し、各民族の平等、団結、相互援助の関係を維持、発展させる。いずれの民族に対する差別および抑圧をも禁止し、民族の団結を破壊するか、または民族の分裂を引き起こす行為を禁止する」とうたっている。各民族は一律に平等であるという政策は、中国政府が民族問題を解決するためにとったもっとも基本的な原則である。

しかし、問題が複雑になった原因は、中国共産党が中華人民共和国成立直前まで、漢族とそれ以外の各民族との「連邦制」を国家統合の基本原則とすることを主張していたが、建国後の1949年の「中国人民政治協商会議共同綱領」では「連邦制」は取り消され、中央政府指導下の「民族区域自治」とされたことにあった。

（2）ウイグルの分離・独立運動

1960年代半ばの文化大革命当時、中国政府はウイグルの学校やイスラム寺院を閉鎖するとともに文化活動をも規制したことによってウイグル民族は漢族同化の危機に直面した。さらに当局は、1971年には旧ウイグル文字を廃止しようとして漢化政策を強制した。そのためウイグル文化の絶滅がすすみ、少なからぬ青少年がウイグル文字の原典を読めなくなる危険に直面した。人民代表大会のウイグル人代表は1980年の第5期全人代第3回全体会議で、「新文字改革」や「同化政策」を批判して、55年の憲法精神にもとづく真の民族自治を要求した。その結果、民族自治の線は絶対に認めなかったものの、それ以外の政策は緩和され、ウイグル人の「文字改革」のためにつくられたローマ字のウイグル新文字の強制はなくなった。これにたいし、ウイグル自治区のイスラム教諸民族は、東トルキスタン人民共和国の崩壊（1944年建国、翌年崩壊）後も暴動や襲撃を繰り返してきた。1981年夏には、漢族との対立が激化、自治権獲得の運動と分離・独立の闘いが各地に広がった。

新疆のカザフ、ウズベク、キルギス民族には、中央アジアにそれぞれの故郷があるが、ウイグルには、湖南省の桃源県にいるごく少数の住民以外は、ほとんどが新疆に集中しており、新疆以外には祖国がない。80年に少数民族学校とイスラム教寺院が復活してからは、

漢学校に通う学生がいなくなり、政府に大きなショックを与えている。ウイグル人が求めているのは、漢人指導による自治ではなく、ウイグル人自身による自治である。今、中国政府が最も警戒しているのは、ウイグル自治区内の分離主義者とイスラム原理主義者が、トルコ・イラン・アラブ諸国に亡命しているウイグル人と呼応して「東トルキスタン・イスラム共和国」を再建するのではないかということである。新疆ウイグル自治区では、1996年4月中旬から5月20日にかけて、自治区内の15か所で45回にわたって、計6万5千人が隣国カザフスタンにあるといわれる「東トルキスタン民族革命陣線」と連携のうえて、漢族幹部による主要部門の独占に反発し、彼らが新疆から離れることを要求するとともに、独立国家の樹立をめざして暴動を起こした（香港『動向』96年6月第130号ほか）。また1997年2月5日から6日にかけて、同自治区伊寧（イーニン）市において、新中国建国以来、最大規模といわれる暴動の発生が伝えられた。この事件に関してトルコにあるウイグル人運動組織「東トルキスタン連帯社会評議会」の指導者は、「もはや武装闘争による独立しかあり得ない」と述べた（『読売新聞』97年2月18日付ほか）。

この分離運動をくい止めるために中国政府はその後、漢人を大量に同区に移住させ大兵力を駐屯させた。とくに90年代の蘭州 - ウルムチ鉄道の開通からは、政府の呼びかけに応じた青年たちが生産建設兵団として大量に移住している。50代初めには人口の6・7%だった漢人は、90年代には41%にまで達し、軍も加えれば最大民族になった。98年時点では、それをはるかに上まわるであろう。

私が98年5月にウルムチからトルファンに向かう際、同行したウイグル人の日本語ガイド青年も「今、私たちウイグル族の青年たちは、毎晩のように集まって情勢を分析している。国際情勢はNHKのラジオ国際放送を聞いて知り、ウイグルの独立運動・東トルキスタン独立への運動の状況は、サウジアラビアのウイグル語放送を聞いてつかんでいる」と話していた。サウジアラビアのウイグル語放送とは意外の感がしないでもなかったが、同じムスリムだからこそあり得る話だと感じたことがある。彼らにとっては、すべての情報システムが当局の管理下にあるので“隣町の出来事”も、クチコミ以外には、はるか外国の電波でなければ知ることができない状態なのである。また、98年8月、南疆のカシュガルに旅した際、あるウイグル人青年たちの誕生パーティーに招かれた。そこでのかれらの話は、89年の天安門事件の学生たちの指導者であったウイグル人のウーアルカイシが、現在でも依然として偶像視されているということであった。分離・独立運動の是非を別としても、彼らにとってはやむにやまれぬ思いがするのである。

おわりに

これまで数回のシルクロードの旅のあと、98年には2回にわたってウルムチ、トルファン、カシュガル方面に旅した。パキスタン国境に近いタシュクルガンへの旅も大きな目的であったが、洪水による増水と道路の崩壊で行くことができなかった。

中国の西域 = 新疆ウイグル自治区における少数民族への中国共産党の統治は絶対的である。その統治の特色は民族自治でなく「民族区域自治」政策である。このことについて我々外国人は口をはさめない。それらの新疆ウイグル地域やシルクロードを旅して率直に感じたことは、私たち外国人はシルクロードにロマンをみるが、新疆に生活する少数民族は漢族の同化政策の波に抗しながらも、悠々と自分たちの文化を保ち続けようとする姿であった。

一方、シルクロードの貴重な文物の発掘・保存に国際的な協力が必要になっている。これらの発掘・保存は中国自身による努力とともに、隣国日本の経済、文化、人的交流も含めた援助や国連による調査・研究、援助・協力、紛争調停なども必要なのである。いずれにせよ、我々外国人にとっても中国人にとっても、シルクロードは二一世紀に継承されるべき世界の遺産であり、薰り高きロマンなのである。ロマンはいつまでも大切に残すことが、現代の我々に残された課題ではないのだろうか。

(中国・シルクロード研究者、シルクロード・ジャーナル主宰、パミール・中央アジア研究会会員、狛江山遊会会員、日本勤労者山岳連盟事務局長、日本ヒマラヤ協会会員)

参考文献

- 『シルクロードを掘る』樋口隆康著 大阪書籍刊。
- 『最新教科書 現代中国』柏書房刊。。
- 『ウイグル その人びとと文化』権藤与志夫編著 朝日選書424 朝日新聞社刊。
- 『民族で読む中国』可児弘明、国分良成、鈴木正崇、関根政美共著 朝日選書595 朝日新聞社刊。
- 『中国55の少数民族を訪ねて』市川捷護、市橋雄二共著 白水社刊。
- 『ありのままの中国』黄 文雄著 日本文芸社刊。
- 『東アジア 民族の興亡』 - 漢民族と異民族の4千年 - 大林太良 生田滋、日本経済新聞社。
- 『民主主義をめざす中国 - 中国経済発展と民主化 - 』西野久雄著 リーベル出版刊。
- 『新疆維吾爾自治区概況』新疆人民出版社、ウルムチ、1985年。
- 『新疆年鑑(1987年)』新疆人民出版社、ウルムチ、1989年。
- 『新疆年鑑(1988年)』新疆人民出版社、ウルムチ、1988年。
- 『新疆年鑑(1989年)』新疆人民出版社、ウルムチ、1989年。
- 『新疆経済工作手冊』新疆人民出版社、ウルムチ、1989年。
- 『新疆概覧』新疆攝影芸術出版社、ウルムチ、1988年。